

スザンヌ K. ランガーの言語論における起源の問題 ： その基本思想と方法論的転回をめぐって

著者	齊藤 伸
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.24
号	No.2
ページ	8-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002778/

Title	スザンヌ K. ランガーの言語論における起源の問題：その基本思想と方法論的転回をめぐって
Author(s)	齊藤，伸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :8-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5255
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

スザンヌ K. ランガーの言語論における起源の問題 その基本思想と方法論的転回めぐって

齊藤 伸

はじめに：進化論と言語の起源

言語の起源に関する問題は、古くから多くの哲学者たちを悩ませ続けた難問であったが、18世紀にヘルダーの『言語起源論』(1772)がそれを人間学的な問いに据え変えたことは大きな転換点であった。彼以降、言語は神学や形而上学の対象ではなくなったからである。また彼は言語の超越的な起源を否定したのと同様に、ルソーやコンディヤックが主張したような自然的な起源をも否定した。しかしながら19世紀になると、この自然発生説をまったく無視することはできなくなる。1859年にダーウィンが著した『種の起源』以降、言語の起源はますます不可解になった。ヘルダーにとって言語は、理性とともに人間が人間であるために前提される条件であったが、進化論によれば人間が過去のある時点より先では言語をもたない存在であったと考えざるを得ない。すると、人間が用いる論弁的な (discursive) 言語はいかにして獲得され、いかにして他の人間と共通した意味内容と統語構造をもつにいたったのだろうか。本稿ではホワイトヘッドの論理学から出発し、カッシーラーのシンボル哲学を発展的に継承したスザンヌ K ランガー (Susanne Katherina Langer, 1895-1985) が、『哲学的素描』(*Philosophical Sketches*, 1962) においてこの問題をいかに論じているのかを明らかにしようとする。

進化論が説く常識的な見解によると、人間の言語は動物が用いる単純な音声的伝達の形式が高度に発達して複雑になったものであろう。しかしながらランガーは、こうした「常識的な」見解を疑い、独自の方法で言語の起源を明らかにしようとする。彼女は次のように主張する。

常識 (common sense) とは、非常に不確実な道具でもある。それは不可欠であると同程

度に人を欺くものでもあるのだ。われわれが常に頼り、また頼らざるを得ないが故に、われわれは真に常識を信頼し得る限界以上にそれを信じようとするので、もし経験を素朴な常識によって解釈することに失敗した場合には、混乱に陥ってしまいがちなのである¹。

言語の起源についての問いは、まさにここで彼女が言うような「混乱」に陥ったのみならず、それを断念せざるを得ない状況にまで追い込まれた。そこでランガーはそうした状況を打開するための方策として、いわば「方法論的な転回」を遂行する。常識的な仕方では人間言語の起源を探究する方法では、まずもって人間の言語を他の動物のそれと比較し、共通した要素を看取する。そして次のように推論するであろう。すなわち、「人間の言語が為し得ても動物の発声が為し得ないところのことは、原初的な動物言語にあとから付加されたものだと考えられ、その結果、きわめて精密化された言葉による交流の体系が創られた」²と。ランガーによると、こうした見解は一見するともっともらしく合理的に思われる。しかしこの比較はそれ以上の何ものをも与えはしない。彼女によれば常識的な方法は常識的な前提と同様に、私たちが常識によって知っている以上のものを与えはしないからである。そのため彼女はこうした両者の類似に注目するという常識的な前提を放棄して、両者における「差異」からそれを明らかにしようとする。

方法論的転回

人間の言語と動物の言語が本質的に異なるものとする理解は、ヘルダーによって明確に指摘され、後にケーラーによる類人猿を用いた実験や、カッシーラーによっても主張されている。そして後にそれはシンボルとシグナルという記号の区別に置

換されることになる。たとえばチャールズ・モリスは次のように述べている。「シンボルとはそれを解釈する者によって生み出された記号であり、それと同じ意味をもつ他の記号の代理として機能する。そしてシンボルではない記号はすべてシグナルである」と³。ランガーもまたそうした区別を認めたうえで、「動物言語はまったく言語ではなく、さらに重要なことに、それは決して言語にはならない」⁴とまで言う。

ところでランガーと同様に人間がシンボルを操る唯一の存在であることに着目したカッシーラーは、動物のシグナル的世界からシンボリックの世界への進化を、いわば「思考様式の革命」として理解した。彼にとってシンボルとしての言語は、「シンボル形式」という人間に本来そなわった素質が次第に発展したものである。しかしながらランガーは、そうした内的な考察だけに満足せず、現実の自然にもその起源を求めていく。なぜなら人間はこの世界に最初から今ある完全な「人間」という姿で現れたのではないとしたら、起源の問題はさらに遡上して前人間的な次元をも視野に入れなければならないからである。ここでの彼女の議論は、彼女の言語論・シンボル論の基本思想の一部を成しているため、これに続く考察の足がかりともなるだろう。

人間と前人間の隔たり

上述したように、人間と動物は言語・シンボルという線で峻別されている。ヘルダーが彼の直観に基づいて著した『言語起源論』では、人間がなぜ言語をもつ存在でなければならなかったのかの説かれた。ランガーもまたシンボルとシグナルの区別を主張するように、そうした基本的な考え方には同意する。しかしながら彼女は、その区別の仕方をさらに推し進めて次のように理解する。

動物の状態と人間の状態を画する線は、私見によれば、言語という線である。そしてこ

れら二種類の生命の間に言語が生み出す断絶は、ほとんど動物と植物の間にあるそれと同様に深いものである。このように考えれば、次のことが納得できるであろう——つまりわれわれが扱っているのは、一般の動物的機能の高度な形式にすぎないのではなくて、前人間の脳に発達した新しい機能 (new function) であり、この機能は、たぶん人間以下の多くの精神活動に依存していると思われるほど、複雑をきわめている⁵。

このようにランガーが探求する言語の起源は、決して超越的な何ものかではない。彼女は自然界における「新しい機能」としての言語の起源を探究するのである。しかしその際に彼女は独特な手法を採用している。というのは、彼女にとって人間の言語は何か単一の要素にのみに源泉をもつものではないとされるからである。そのため彼女の主張は、単なる自然主義的な言語起源論⁶への回帰を目論んだものではない。むしろ彼女は、言語の必要条件をいくつかに分けて考察することによって、そのそれぞれが異なる動物から見出される点を指摘している。

失語症の症例からみる言語の非統一的性格

ランガーはこの点をいくつかの病理学的な症例から考察している。彼女が『哲学的素描』を著した20世紀の中ごろには、今日ほどではないにしても、すでに多くの失語症に関する症例が報告されていた。たとえば、文法構造は失われていないにもかかわらず、そこにはめ込むべき単語が失われている場合や、それとは逆に文法構造がすっかり失われて滅裂な言葉を話すなどである。あるいは、生物の名称を表す語彙がすっかり欠落したにもかかわらず、時計、机、スリッパなど、無生物のそれは失われていないこともある。あるいは、自分に語りかけられた言葉を復唱することはできるが、自分の言葉をもって自発的に語ることができない

など。このような様々な様相を示す症例は、ランガーをして言語を単一の起源に還元することを不可能にした。そして彼女は次のような仮説を提起する。

このような特異な——時にはまことに奇怪な——症例に直面したとき、私には、統一的言語現象から別々に消失し得る要素は、歴史以前の脳において別々に発達してきたのかもしれないという考えが浮かんだのである⁷。

ここでランガーの言う「別々に発達してきた」言語の要素、そして言語への道を拓いたと考えられる要素は、それぞれ別な機能として動物の世界にも同様に見出される。こうして彼女は言語の起源を人類学がするよりも遠くにまで遡って考察することになる。なぜなら人類学はその名称が示しているように、人類が人類であることを出発点とするからである。彼女はむしろ言語が前人間的な存在のうちに与えられたいくつかの「原材料」から成立すると考え、人間においてそれらが見事に結合させられたと考えるのである⁸。

言語を構成する要素が前提する諸条件

ところで言語の機能がひたすら精神的な作用にのみ依存するのでないことは明らかである。それはまずもって「音声」でなければならない。音声それ自身は単なる物理的な空気の振動に過ぎないが、その空気の振動が何らかのシンボルとしての言語として機能するためには、或る特定の空気の振動でなければならない。すると言語という特定の空気の振動を生み出するためには、それを特定の振動とすることを可能にする身体的な条件が全体として人間の側に整っていなければならないことになる。ランガーはその条件として、次の4つを挙げている。すなわち、①音声を継続的に発し、それを変化させる能力、②他のものに反応して声をだそうとする性向、③判別力をもつ聴覚、④模倣の道具である耳によって音声を微妙に調節する能

力である⁹。

おわりに：シグナルからシンボルへ

ランガーはこれらの言語を構成する身体的な要素は、上述したようにそれぞれ異なる種・類の動物に源泉を辿ることができると主張する。これらの要素はすべてが同時に備わって初めてシンボルとしての言語を可能にする。人間以外のいかなる動物も論弁的な言語をもたないのは、それらがたとえこれらの要素のうちの一つや二つを有するとしても、結局それは言語の部分の有しているに過ぎないからである。彼女がシグナルは決して言語にはなり得ないと断言するのは、この意味においてである。これらの諸要素が或る時にすべてが同時に原人間的靈長類のうちに生じたに違いないとランガーは考える。しかしながら、これらの要素の一つ一つはすべてあくまで自然的な、つまりシグナル的な要素に過ぎない。人間の言語はシグナルではなく、シンボルである。シグナルがシンボリックな言語へと進むためには、やはりそれを生み出すための最後の決定的な一歩が踏み出されねばならない。その言語における最後の一步こそが、彼女がここで新たに提起する「視覚的なイメージ」(visual image) という彼女に独特な考え方である。本研究では、言語起源の問題におけるこの彼女に独特な思想が続く考究課題となるであろう。

注

- 1) Susanne K. Langer, *Philosophical Sketches*, The John Hopkins Press, Baltimore, 1962, p. 28. (スザンヌK.ランガー『哲学的素描』塚本利明・星野徹訳、法政大学出版、1974年、36頁) 以下、邦訳書での出典箇所は括弧内にその頁番号のみを記す。
- 2) Susanne K. Langer, op. cit., p.28-29. (36頁)
- 3) Charles Morris, *Signs, Language and Behavior*, George Braziller, INC., 1955, p. 25.
- 4) Susanne K. Langer, op. cit., p.29. (37頁)
- 5) Susanne K. Langer, op. cit., p.29. (37頁)
- 6) たとえばルソーの *Essai sur l'origine des langues* (1781)

などがその典型であろう。

7) Susanne K. Langer, op. cit., p.37. (43頁)

8) そのためランガーの言語論は、人類学的というよりもむしろ、生物学的な特質を帯びている。それゆえたとえばアドレアス・ウェーバーは彼女の思想をハンス・ヨナスのそれと並ぶ生物記号論の原型と見なしている。

Adreas Weber, Feeling the signs: The Origin of Meaning in the Biological Philosophy of Susanne K. Langer and Hans Jonas, in; *Sign Systems Studies*, 30.1, 2002.

9) Susanne K. Langer, op.cit., p.39. (46頁)

(さいとう・しん 聖学院大学基礎総合教育部ポスト・ドクター)